



秋庭史典 《書物の光線》—お喋りへのお誘い

【作品はお喋りの相手】

それは友人とお喋りするためのきっかけと考えよう。作者が何を言いたいかも大事だが、それ以上に、自分たちであれこれ考えるのも大事。(ただしどうぞお気楽に。)

【ステップ1】 お喋りの準備。

五つのポイント
とはいえ、もし目の前の作品を見て、「うっ・・・何も思いつかない」と困ったら、それについて喋るためのポイントがあるのでご心配なく。そのポイントが、①指示②表出③見た目④メタ⑤指令、の五つ。わからなくても大丈夫。ぜんぜん難しくないのです。

①指示—何を指し示しているか？

これはわかりやすい。作品が何を指し示しているかを考えること。見てみよう。

一本だ。

もっとよく見てみよう。

—ラベルが貼ってあるから図書館の本だ。

タイトルも見てみよう。

—日本の近代美術、日本の芸術論、日本のアヴァンギャルド、日本のシュールレアリスム・・・日本か東洋にまつわるもので、しかも芸術論ばかりだね。

【①から得られたキーワード：本、図書館、日本、芸術論。】

②表出—作者の言いたいことは何か？

じゃ作者の言いたいことって何だろう？ と考えるのは、まだ早い。もっと手がかりを集める必要がある。もう少し見つめてみよう。

③見た目—見た目の特徴は何か？

—一列に並んでいる。(①の結果と結びつけてみよう。)

—図書館の開架風だね。

—一冊傾いている。

—誰かが借り出した本があるんだ。

—じゃここにあるのは・・・

—借りられずに残ってる本。(あまり人気のない本?)

見た目の特徴はまだある。

—光ってるね。

—どこが光ってる？

—一本じゃないね、本のまわりだね。でもおかしい。この作品のタイトルは、《書物の光線》なのに。

作者は嘘をついているのか。作者がまじめな人だとすれば、何か意図があって、わざとそういう言い方をしているのではないか、と考えるのが普通だろう。②に近づいてきたね。

【③から得られたキーワード：借りられていない本、光を受けていない本、タイトルとの矛盾】

④メタ—何についての作品なのか？

①と③から得られたキーワードを結び付けてみる。するとこんな風になるだろう。

【キーワード】

①本、図書館、日本、芸術論

③借りられていない本、光を受けていない本、タイトルとの矛盾

【結び付けた結果】

図書館にある日本の芸術論に関する本は、誰にも借りられていない。

これは借りられもせず、光を放つことのない本たちである。

ということで、この作品は、

「図書館にある日本の芸術論は、(書物が本来放つべき)光を放つことがない」、

ということについて、何かを言っているようだ。なんとなくわかってきたところで、ひとまず準備終了。

【ステップ2】 お喋り。

なんとなく言いたそうなことがわかってきたところで、こちらの想像力を働かせてお喋りしてみよう。では、お喋り開始。話題は芸術論から教養教育院との関わりまで・・・。

○いきなりだけど、芸術論はなんでつまらないの？

▼簡単だよ、ナマの芸術体験とは関係ないからさ。

○じゃ話を変えて。イチローを信奉している人が、そのバッティングの秘密を知りたくてスポーツ科学の本を買うのはどうして？

▼そうだな。ほんとのことはイチローにしかわかんないと思ってるけど、それでも興味があって知りたいから。

○それだけ？

▼うーん・・・イチローを信奉してるだけでなく、科学自体に興味があるから。科学ならそのバッティングをなんて説明するのか。

○科学の眼にはイチローのバッティングがどう映るのかってことね。だったら同じように、科学の目には美や芸術や芸術家がどう映るのかだったら、今の人も興味あるんじゃない？

▼そうだね。茂木健一郎ならなんて言うか、とか。あと、背景世界に興味のある人も読むでしょ。作品の背景となっている西洋史に興味があるとか、中国史に興味があるとか。

○うん。だとしたら、芸術論がつまらないんじゃなくて、魅力のなくなった学問が語っている芸術論が読まれていない、ってだけのことじゃない？

▼その学問が輝いているうちは、たとえ中身がチンプンカンプンでも、それなりに読まれる。

○そう。逆に美や芸術は、時代の最先端の学問が常にその解明を目指す目標ってことになる。

▼説明できるだけでなく、その説明自体どれほど美しいかも問われる。数学みたいに。

○そういえば、この作品見てごらん。本の周りは光っているのに、光は本を透過してない。

▼ほんとだ。陽の当たらない本（陽の透らない本か）。かわいそうだね。

▼ところでさ、芸術作品っておもしろい？ 今こうやって見ているわけだけど。

○今の話といきなり矛盾するみたいだけど、「芸術は終わった」なんて言葉が流行ってたらしいしね。

▼うん、理想としての美や芸術の時代は、もう終わってる、というやつね。

○じゃあ、矛盾してないんじゃない？ 説明されるべき美や芸術はすでに過去のもので、いまは説明する側の方にみんなの関心移っているってことなんだから。

▼この作品も「芸術論についての」作品、つまりは説明する側だしね。でもさ、この作品は、どっちかっていうと、美や芸術のありようというより、「美や芸術を説明している学問」についての説明だよ。感覚的な説明だけど。

○でもそれって昔からそうじゃない？

▼というところ？

○だってさ、キリスト教美術は、キリスト教神学とかさ、そういう学問で言われてることの感覚的表現だったわけでしょ。その学問が理想とする美のありようが変われればたとえばルネサンスに対してバロックが出れば、それに必要な感覚表現が生まれるっていう。

▼そんな生半可な知識で大丈夫？ しかも反映論っぽいよ。

○いや、ちょっとやばい。だから、それでよければの話なんだけど、今物理学や工学で用いられている科学映像と芸術作品の違いってなんなのかな？ 学問の内容についての感覚的説明ってということなら、科学映像の方がはるかにすごいんじゃないの？ お金もかかっているし。

▼そうだね。実際aesthetic computingやscientific visualizationの世界って、豪華絢爛だしね。

○違うとすれば、そういう映像は、ふつう学問そのものについての反省を表現しないことかな。科学の内容は表現してもね。

▼なるほどね。うーん・・・こういう作品の内容についてあれこれ考えるには、科学の現状や歴史、それに芸術や宗教などの文化がどんな風に関わってきたかを、ある程度トータルに知っておかなきゃだめだね。

○そう、たった今「科学は科学そのもののありようについての反省を可視化しない」なんて偉そうに言ったけど、前に豊田講堂で開かれた「COLD_SCHOOL MS004: [講義としての芸術]」展で科学哲学者の戸田山先生が紹介してたように、科学書の扉絵が科学の自己認識の見事な可視化だった時代もある。そういうことも知っておかなきゃ。もしかしたら、ほんとうは今だってそうなのかもしれないし。

▼うん。芸術だってほんとに終わってるわけじゃなさそうだし。そういう意味じゃ、これは、教養教育院向きの作品だね。いろいろ勉強しなきゃ。

○ところで、忘れてることがあるんだけど。

▼なに？

○日本っていう文脈。この本の背表紙見てよ。みんな日本にまつわるものでしょ。ほら、日本の場合、学問も美術も、もとは西洋からの輸入品だったところから出発し、今みたいになってきた。それについて・・・

▼また今度にしようか。

○そうだね。イチローと日米野球のちがいに絡めて、来週にでも。それから図書館っていう知の形態の現在についてもね・・・作家の長尾さんは、さっき話しに出てた「COLD_SCHOOL」展でも、図書館を舞台にした作品、《芸術を探して》を展示していたんだよ。今回そのビデオ上映もあるらしいから。

▼わかった。じゃまた。

【ステップ3】 お誘い—もっとお喋りを・・・

五つのポイントのうち、まだ残っているものがありました。

⑤指令—見た人に何をしてほしいと思っているのか？

作品についてあれこれ勝手にお喋りしたあとは、あらためて、それを作った人が何を望んでいたのかを知りたくなるのが人情というもの。イチローのバッティングが分析されたあと、視聴者が「イチロー自身どう考えていたのか？」を聞きたくなるのと同じだ。テレビなら画面はインタビューへと切り替わるであろう。この作品は、すでに見たように、科学と芸術を含めた広い意味での学問のありようについてお喋りするよう呼びかけていた。ならばこの誘いに応えて、今度は実際に作者とお喋りしてみませんか？ 作者ならびに主催者の気持ち（五つのポイントの②）がもっとわかるかもしれません。繰り返しますが、作品は、ある事柄の真偽についての評決ではなく（そんな偉そうなものではありません）、ある事柄についてのお喋りへと誘う案内状なのです。

そのための時間が用意されています。（詳しくは会場の案内を見てください。）

さらに関心のある人へ（文献紹介）

◆五つのポイントについて

島本+岸編（1998）『絵画のメディア学』昭和堂

中村+岸編（2001）『日本美術を学ぶ人のために』世界思想社

野本+山田編（2002）『言語哲学を学ぶ人のために』世界思想社

谷川渥編（1988）『記号の劇場』昭和堂

◆知と美、光の関係について

ハンス・ブルーメンベルク（1977）『光の形而上学—真理のメタファーとしての光』朝日出版社

熊田陽一郎（1986）『美と光—西洋思想史における光の考察』国文社

◆科学画像・技術画像と芸術の関係について

Fishwick, P.A.(2006), Aesthetic Computing, MIT Press.

岡崎乾二郎（2007）編著『芸術の設計—見る/作ることのアプリケーション』フィルムアート社

戸田山和久（2005）『科学哲学の冒険』NHKブックス

戸田山和久（2004）「アートと科学：科学書の扉絵を読む」（「COLD_SCHOOL MS004: [講義としての芸術]」展（主催：名古屋大学社会連携室・

MEDIASELECT）、オープニングレクチャー、2004年10月1日）

エドガー・ヴィント（1965）『芸術と狂気』岩波書店（芸術は終わった、についても記述あり。）